

『我が家のお掃除大作戦』

萩野燕

3,564 字

あらすじ:

東京から地元へと単身赴任で戻る『僕』を待っていたのは、妻と息子の武史と、小さな小さな新しい家族だった。命を育てる不安、思いがけなく始まるお掃除大作戦。たった週週間の出来事が息子を、そして『僕』を変えた。

もうすぐ我が家に到着する。しばらく東京とはサヨナラだ。

公衆電話から自宅にかけると、懐かしい妻の声。

「お風呂先に入るわね。」

毎日聞いているはずの声である。しかし今日は僕の耳が冴えているのだろうか、美絵子の声はいつも以上に鮮明に聞こえる。

そして、受話器の先から聞こえるのは小 2 の息子の熱い吐息。ひどく興奮しているようだった。

「嬉しそうだな、何かあったのか。」

「パパ、僕ペットを飼ってもらったんだ。」

「ぺ、ペット……？」

「うん、当ててみて。」

「あ、ああ、(何も聞いていないぞ……)、犬か？」

「違うよ。」

「猫か。」

「ううん、もっと小さいの。」

「ウサギだね。」

「もっと小さい。」

「分かった、カブトムシだな。」

「ちがーう。パパ、帰ってからの楽しみ。」

家族のいる家庭から通勤できることは、本当に嬉しかった。しかしドアの前に立った途端、僕は家族を支える責任や子育ての重さを考えてしまった。体に大きな鉄の塊が押し掛かる。うちにはやんちゃ盛りの元気な息子がいる。

「パパ、おかえりなさい！」

「おかえり！！夕飯すぐ温めるから。」

洗濯物を抱えて行ったり来たりしている妻と、部屋のまだ片付けられていない皿、テーブルクロスにこぼれたままのミートソースを見て、家の大変さを身に染みて感じた。

「パパ、これだよ。」

武史の目はキラキラと輝いていた。武史が指さした先には、小さな容器があった。容器の中には水がたっぷり入っていたが、何にも入っていなかった。

「この中にいるのかい。」

「いるよ。」

いや、何もいないぞ。

「これだよ、まだ卵なんだ。」

よく見ると小さな粒が水中でゆらゆらと漂っている。

「卵？これか？」

「うん。」

「何の卵なんだい。」

「待っててね。」

武史は散らかった漫画や脱ぎ捨てた靴下を器用にかわしながら二階へと上がっていき、しばらくしてカラーの説明書を手に持って戻ってきた。

「これが生まれるの。」

「何だ、見覚えがあるぞ。あつ、ホネエビ！」

「何言ってるのパパ、ホウネンエビだよ。」

グラスのように透き通った体、小さい頃によく田んぼで見かけた。従弟と手からこぼれるほどたくさん集めて、虫かごに水をたっぷり溜めて育てたんだ。

「どこに売っていたんだ、ホネエビ。」

「ホネエビじゃないよ、ホウネンエビ。ジャジャタウンのおもちゃ屋さんだよ。母ちゃんが買ってきてくれたんだ。」

「良かったなあ。どうだ、パパも一緒に育てていいかい。」

「いいよ。」

武史は最初の1週間、毎日のように水の入った容器を見つめた。しかし飽きてしまったのだろう、すぐにホネエビの観察を止めてしまった。

「パパ、エビぜんぜん生まれなないじゃない。もうこれ洗面所で流していいかな。」

思いがけない息子の言葉に僕の頭は真っ白になった。

「何言ってるんだ。生き物なんだ、そんなことしていいわけないだろ。」

「だって何にも変わらないよ。もう死んでるよ。こんなんだったらカブトムシとかのほうがよかったな、つまらないもん。」

グッと我慢した。武史にとって、命を預かり育てるのは初めてなんだ。まだ分からないことだって沢山あるだろう。

「まだ、まだだ。待ってみよう。」

時計が夜の12時を打った。家族はもう寝静まっている。すぐ手に取れる位置に、例の説明書とブラックコーヒーを置き、僕はそっとパソコンの電源を入れた。一文字一文字検索欄に入力する。

『ホウネンエビ 育て方キット 孵化』

ついつい、エンターキーを強く押してしまう。秒針の音しか聞こえない静かな部屋だ、カタンッという音が響き渡る。

なるほど、子供用の自由研究キットではあるが、同じような悩みを抱えた父親の悲痛

なブログが大量にヒットする。育てるのは難しいんだなあ。

『水槽用ヒーターで水温の調整をおこなったら、四回目でやっと孵化しました♪』

うん、ヒーターか。あんな小さな容器にどうやってつけるんだろう。まあ、田んぼの水温とは違うもんな。

『ホネエビ 田んぼ』

気になった言葉はすぐ検索する。

出てくる出てくる、ホウネンエビの記事。あ、やっぱりホネエビって言う地域もあるらしい。国が違えば天女エビとも言うのか。

記事をスクロールしていくが、目がかすむ。頭に入ってこない。

『水質環境とホウネンエビ、地域によってはその数減少』

ん？昔はあんなにたくさんいたはずなのに。

『キレイな田んぼでしか育たないエビは、農薬などが多く使われた田んぼでは数が減少している。ホウネンエビ復活プロジェクトに向けた動きが……』

眠い、限界。続きは明日にしよう。水温が大事、ホネエビはキレイな田んぼで育つ…

一週間が経つのは思っていたよりずっと早く、帰福して 2 度目の日曜日がやってきた。新聞を脇に挟み寝ぼけ眼でリビングを歩いていると、足裏に激痛が走った。床に落ちていた漫画を踏んでしまった。漫画の角が土踏まずの真ん中に強く刺さる。

「あ、痛っ。」

ふと武史を見ると、テレビゲームに夢中になっている。

「武史、何度も言っているじゃないか。今日こそ部屋を片付けなさい。」

「あとで。」

「武史。」

つい強い口調になる。怒ったことなんてほとんどないから、自分でもびつくりして怒りが冷めてしまった。父親の威厳どころじゃない、なんて情けないんだろう。急に体が小さくなっていくように感じた。

「武史、エビはキレイなところが好きらしい。ほら、お片付けをした方がいいんじゃないかなあ。エビも今の部屋だとイヤなんだよ。」

「パパ、しっかり言ってやってよ。」と、台所から美絵子の声。

武史は「めんどくさい」の一点張り。

「武史、早くエビに会いたくないのかい。」

「だって。もう無理だよ。」

「無理なんかじゃない。武史がやらないんだったらパパがやる。」

僕は暑い水を入れたペットボトルを容器にくっつけるように配置し、周りをタオルで巻いた。

「パパ、水槽に何するの。」

「お前はもうエビが要らないんだろ。」

「えっと……。タオル掛けちゃったら、もう見えなくなっちゃうじゃん。」

ためらっているようだ。

「温めたら、エビは生まれるの？」

「ほら、ニワトリだって卵を温めるだろう。」

「エビとニワトリっておんなじなの？」

「おんなじさ。」

僕は家に居るときはできるだけ水が冷えないように、ペットボトルを入れ替えた。温かいところに置き、でも直接太陽の光が当たらないようにタオルをかぶせて容器を守った。

トイレの度に寄り道して、こちらを覗きに来る小さな足音。エビの様子が気になるのだろう。

「あのね。」

「なんだい。」

「パパ、エビがきれい好きって本当？お部屋を片付けたら早く生まれるの？」

美絵子と僕は静かに顔を見合わせ、ほほ笑み合った。

武史は漫画の整理と、リビングにある使われていない勉強机の掃除を始めた。静かになった、と思って振り返ったら、急いで漫画を閉じ掃除を再開する息子が目に入る。

「ああ！！」

と、大きな声が聞こえた。おそらく、無くしたカードかゲームカセットが見つかったんだろう。まあ少しずつ楽しくなってきたみたいで、良かった。

僕も家に帰ってから家族みんなで洗濯物を畳む、そんなひとときが、一日で一番大好きな時間だった。学校の話で口が休まらない武史は、僕や美絵子から「ほら手も動かして」と言われながらも、楽しそうに手伝った。

「私があんなに言っても自分からお掃除しなかったのにねえ。学校から帰ったら真っ先に水槽を覗き込みに行くのよ、あの子。」

ペットボトルの水替えもいつの間にか武史が率先して行うようになった。タオルの中の様子が気になってしょうがない様だった。

お掃除大作戦七日目。顔を洗ったばかりでぼうっとしながらネクタイを締めているときだった。

「パパ来て！動いてる！」

リビングの息子の声に思わず雑誌を放り出し、部屋を突っ走る。椅子の倒れる音。台

所にいる美絵子の「何事？」と、叫ぶ声。

僕と武史はゆっくりとタオルをはがし、水槽を覗き込んだ。その中にいたのは数匹の小さな小さなエビだった。背中を下にして、細かな足で必死に水をかいている。

「本当に透明だろ。骨が透けて見えるからホネエビっていうんだよ。」

「ホウネンエビだよ、パパ。でも、このエビきれいだね。」

「グラスみたいだ。」

「氷みたいにきらきら光ってる。喜んでるんだよ、パパ。」

「武史とパパで部屋をお掃除したからだよ。」

自然と目が合い、二人で笑い合う。エビを見つめる武史の目は一段と輝いていた。

片付いた部屋は清々しかった。しかし何より体中がサッパリと落ちつき、重いものが消えてなくなったように感じた。

「武史、これからもしっかりと育てるんだぞ。」

「分かってるよパパ。」

ホネエビたちの小さな命、そして武史から、沢山のことを教えてもらったようだ。

綺麗な空気をいっぱい吸い込み、大きく背伸びした。

「今日も頑張ろう。」

僕たち2人はしばらくエビたちを見守ると、朝ご飯に食卓へと向かった。